

事業名：14 未利用海藻増産試験

期間：H27 年度～H29 年度

予算額：H29 年度 2,097 千円

担当：養殖・漁場環境室（藤原 大吾）

## 目的

未利用海藻ほりおこし調査（H24～26年度）によって発掘したアカモク、フサイワズタ、セイヨウハバノリ、ホンダワラの増養殖技術に関する知見を収集し、漁業者等が取り組む6次産業化（海版葉っぱビジネス）を創出、拡大するための技術的支援を行う。

## 成果の要約

### 1 調査内容

#### (1) アカモク増殖試験

2015年2月に田後漁港内でスポアバッグ法により漁場拡大試験を試みた場所において、潜水観察によりその後の造成効果を追跡調査した。

また、県内漁協の要望に応じ、2018年2月から3月の期間に県内3地区の漁期前のアカモクの分布、成熟状況を潜水観察により調査し、県内漁協に情報提供した。

#### (2) ホンダワラ増殖試験

2015年から年1回、ホンダワラの成熟時期となる3月下旬から4月上旬頃にスポアバッグ法により漁場拡大試験を試みている逢坂港において、潜水観察によりその後の造成効果を追跡調査した。

#### (3) フサイワズタ増殖試験

2017年5月から6月に泊地区石脇港突堤（水深4m付近）と岩戸漁港沖波止内側（水深2m程度）において母藻を移植し、その後、潜水観察により経過観察を行った。移植した母藻には栽培漁業センターの開発試験池において育成した母藻を利用し、これをトリカルネットにはさみ、水中ボンネットで岩盤に固定した。

#### (4) セイヨウハバノリの漁港内養殖試験

2017年2月に天然個体から干出刺激により配偶子を採取した人工種苗を培養し、塩ビパイプと種糸を用いた養殖基質に採苗した。11月下旬から港内に垂下し中間育成した後、2018年1月上旬から泊漁港内にて種糸をロープに巻付け養殖試験を行った。



図1 調査実施場所と各地点での調査対象種

### 2 結果の概要

#### (1) アカモク増殖試験

2017年4月の潜水観察では、トゲモクが優勢し、アカモクをほとんど確認することができなかった。一方で、造成地点から100m西側の岩礁帯においてはアカモクが優

占して繁茂する藻場があり、そこと比較して造成地点周辺は植食性のウラズガイが多く見られ、これらの食害をうけている可能性が考えられた。

また2018年2月から3月に行った石脇港、大谷海水浴場沖潜堤（網代）、田後港（図2）の調査では、波当りが比較的強いと考えられる石脇港、大谷海水浴場沖潜堤において主枝の途中から切れた個体が多く確認でき、例年と比較し、藻場が減少している様子が確認された。秋季から冬季にかけて例年より荒天となる日が多く、強い波浪により藻体が一部流出したと推測される。



図2 3地区の調査実施地点と繁茂状況

#### (2) ホンダワラ増殖試験

漁港内では徐々にホンダワラの群落が広がりつつあり、2017年3月に母藻を設置した地点の周辺には7月には多くの幼体が着生し、造成効果を確認できた。その後、11月以降に実施した潜水観察では伸長した個体がほぼ確認できなかった。主枝の途中から切れた個体が多く、秋季から冬季の強い波浪により藻体が一部流出したと推測された。

#### (3) フサイワズタ増殖試験

両地区において8月までは岩盤上に匍匐枝が伸長し、順調に生育している状況が確認できた。その後はほぼ生育が止まり、11月頃までは藻体の一部を確認することができた。一方で、それ以降は、藻体を確認することができなかった。

#### (4) セイヨウハバノリの漁港内養殖試験

沖だし後1ヶ月程度経過した時点で平均葉長が25cm程度に伸長し、2kg程度のセイヨウハバノリの収穫に成功した。幼葉体（1-2cm程度）の生育期に基質への泥等の付着物を除去し、成長が阻害されることを防ぐことで良好な結果が得られたと考えられる。

## 成果の活用

以下の会議で発表を行い、県内漁業関係者に周知、技術の普及を図った。

また、県内漁協各支所に漁期前のアカモクの分布状況や適切な漁獲時期、漁獲方法について指導した。

・平成29年度アワビ・サザエ検討会

### 関連資料・報告書

・平成29年度中国五県公設試験研究機関共同研究担当者会議資料

